KCELS Newsletter No.7
MARCH 1992

ＫＣＥＬＳ第16回大会

別府恵子

"Something there is that doesn't love a wall," と言っても、これは東西ベルリンを隔てていた壁の話ではない。ニューイングランドの農夫が春になって、冬の間に壊れた隣家との間の柵（＝a stone wall）を隣人と一緒に直すというフロストの「柵を直して」の一行目。

昨秋11月15日に恒例のＫＣＥＬＳ大会が開催された。周知のとおり、同学会の特別講演には英文学、アメリカ文学、英語学の三分野から交代に講師を招聘している。面白いことに、過去の講演を振り返って見ると、それぞれの専門分野によって内容は言うに及ばず講師自身にもある特徴が見受けられる。概してアメリカ文学者には、フロストの詩にあるように、どこか正統的慣行、規範を嫌う衝動があるのでなかろうか。今年度は企画自体にそうした試みがなされ、文学プロパーでなくアメリカ史の専門家筑波大学教授明石紀雄氏をお迎えしたが、参加した学生たちには各研究分野の相関性を学習する貴重な機会となったと信じている。今大会開催にご協力いただいた会員諸氏に感謝したい。

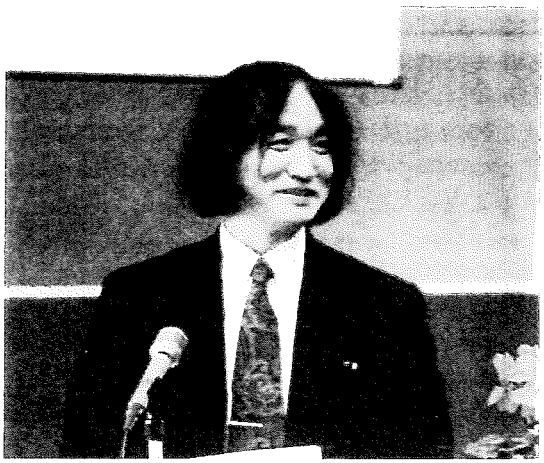
田園の理想の中の軋み

――奴隷制についてのジェファソンの終末論的ヴィジョン――

筑波大学教授　明石紀雄

トマス・ジェファソン（1743―1826）の名を、一般に切迫したあるいは悲観主義的なニュアンスをもって理解されることの多い終末論（apocalypse）と結びつけるのは意外に思われるかも知れない。彼について、代表的な18世紀アメリカ啓蒙思想家であったという評価が定着しているからである。

啓蒙思想をひとことで定義するのはむずかしいが、(1) 既存の宗教的権威や伝統からの「人間の理性」による解放の志向、(2) 恣意的な権力に対抗する「政治的自由」の主張、(3)「自然の状態」の想定と国家・社会・文明の成立過程への省察がその主たる構成要素であったと見るのに、大きな異論はないであろう。そしてジェファソン



はその生涯を通じて、このいずれの要素をも見事に体現したのであった。

今ある世界が究極的に至福あるいは破滅を迎えることになるのであれ、その終わり方についての予想は多分に宗教的な性格を帯びるものである。とくに人間の能力を超えたところで何らかの審判がなされるとする期待もしくは不安がある場合には、その傾向は強い。しかし、「ヴァージニア信教自由法」および「アメリカ独立宣言」の起草さらにはヴァージニア大学の創設に深く関わったジェファソンが、自立（self-determination）の可能性を信じ、母国のみならず人類の将来に対して楽観的以外のヴィジョンを有していたとは考えられない。またそのヴィジョンは、既存の啓示宗教に基づいたものではなかったのである。

ジェファソンのアメリカの将来についてのヴィジョンは、田園主義(pastoralism)のそれであった。すなわち「文明」と「野蛮」の中間の状態が理想的とされ、それはしばしば農本主義(agrarianism)と同義に解される。事実ジェファソンは独立自営の農民からなる農業共和国を追求したのであった。それは、政治経済学のあり方を示す理念のみにとどまるものではなかった（ジェファソンが大統領としてその理念の実践にあずかれる機会を持ったとき、彼が国際的分業・国際紛争の平和的解決を模索していたことは認められなければならない）。新興のアメリカ合衆国が果たすべき歴史的運命を示す大きなヴィジョンとしての役割をも、それは有していたのであった。

ジェファソンは彼のこのようなヴィジョンを数多くの公文書などを通して表したのであった。「アメリカ独立宣言」(1776年) はその代表的なものである。また彼の唯一のまとまった著作である『ヴァージニア覚書』(1784年私家本として刊行) も、そのすぐれた顕現であると見なされてきた。しかしこれらの著作を詳しく検討するとき、彼の楽観主義に彩られるレトリックとは不調和な箇所が幾つも見られる。1820年に執筆を始めた彼の最後の「公的活動」とも見なしうる「自伝」にも、それは見出されるのである。

すなわち奴隷制について言及するとき、かれは明確に読む人の感情を喚起し直ちに決定的な審判が下されるような雰囲気を伝える表現——"tremble," "shudder," "convulsions," "extirpation," "supernatural interference" など——を用いているのである。これは書く側つまりジェファソン自身の心の動揺を示すものと見ることはできないであろうか。ジェファソンが私的書簡においてしばしば自分の心情を発露したことは知られている。それとは対照的に、公的文書を著すとき彼は慎重に表現を選んだのであった。しかし、そのような配慮にもかかわらず奴隷制について述べるとき終末論的なレトリックに頼らざるをえなかったことは、この問題について彼が根本的なところで苦悩していたことの証しではないだろうか。

彼自身の邸宅およびプランテーション＝モンティチェロの例を引くまでもなく、ジェファソンが描いていた農業共和国は奴隷の労働に依存することによって初めて実現が可能であったことは、否定できない。自立の理想を追求し、調和ある人種関係に立脚した社会を実現するには奴隷制は本来的には認められなかったはずである。しかしジェファソンはそれを包含したままの田園主義の理念を構築していったのであった。さらに奴隷制廃止後の人種共存の可能性について、ジェファソンは曖昧な態度しか示さなかった。このような点を考慮するならば、田園の理想には覆いかくすことのできない軋みが内在していたことが明らかになるであろう。ジェファソンはそれについて弁明はしなかったが、積極的にその矛盾を克服しようともしなかった。その点が啓蒙思想家としての彼の限界ではなかったであろうか。

■研究発表

チョーサーの史的現在についての一考察

長谷川　和　子

過去の出来事が語られているチョーサーの韻文の中に、現在形の動詞又は助動詞が使用されている事があります。それは説話現在と史的現在を包摂しています。後者は、語り手の世界に於ける現在の如何なる要素をも排除したものです。その用法は、物語に臨場感や即時性を与える工夫だと、説明されて来ました。通常それは、或る場面が描写される時、多くの動詞・助動詞が使われますが、この内の数個のみに現在形が付与されます。本考察は、チョーサーは、どの様な基準に従って、数個のそれらに、現在形を付与したかを、「騎士の話」に基づいて、文脈的・構造的見地から、明らかにする事です。

或る限られた場面の描写に用いられた述語のほとんど全てに現在形が与えられた4場面を除いて、134回の史的現在が、散発的に出現します。その内48回（約36％）は、意味的に動的な動詞によって占められています。調査の結果、「限られた場面で焦点を浴びた人物の行為が意味的に動的な動詞によって、表わされる時、一般にその動詞を含む述語は、現在形で表わされる。その動的動詞が、特に場所移動を含意したり、同じ段落で用いられた他の動詞に比べ、具体性の高い動詞が現在形を受け易い。」という事が明らかになりました。この条件に合致しているにもかかわらず、現在形が付与されていない例が、条件下の動詞全体の約22％見られますが、韻律上の制限や、強い義務感などの特定の心理表現の為に、過去形の法助動詞が選択された場合などに、多く見られるものです。

動的でない動詞については、説明的、暗示的表現の非臨場性を、現在形で浮かび上がらせる事によって、補っています。それらの一つが、登場人物の性格描写です。視覚による認識の出来ない性格は、その人物の行動や、語り手の判断を通してのみ知らされますので、説明的、観念的にならざるを得ず、非臨場的です。従って、名誉ある行為や、輝かしい象徴を現在形で表わす事により、その欠点を補っています。暗示的表現に与えられた現在形は、やがて起るべき重大事への伏線として、物語の展開に必須の出来事に光を当てています。主人公達の争や死の原因となる出来事には、必ず現在形が与えられています。特異的なのは、音に関する表現です。語り手の視覚外認識事項として、しばしば現在形が与えられています。それは同時に、聴覚的緊張を与える事によって、長い物語を緊密にします。

構造的観点から見ますと、左右対称の筋立てを、現在形が補強しています。対称となっている二つのエピソードの劇的場面には、同じ動詞、又は意味的に関連する動詞に、等しく現在形が付与されています。それによって、等しい悲しみ、勇気、強さが端的に示されます。枠構造から見ましても、その構造と、現在形の選択は、調和しています。作者の才能の冴は、これら基準の意図的逸脱

に見られます。左右対称形を破る事によって、心理の不均衡を示したり、焦点を不当に当てる事によって、登場人物の社会的地位の逆転を強調したりしています。作者の史的現在の効力は、我々の想像をはるかに越えるものです。

For the Love of the Fates : A Reading of *Ethan Frome*

橋　本　登代子

Edith Wharton の *Ethan Frome* は、印象的な作品である。*Ethan Frome* はアメリカという国の文化を内包する作品と言うより、作者の視点がアメリカの、一時代の一地域を精密に表現しようとした作品であると言える。そして、Wharton は自然描写に重点を置きつつ、Ethan Fromeの人間性の中に、作品のテーマを提示している。登場人物としては、三人の中心的人物が劇的ドラマを展開するのであるが、個人の中に人間性を注目する作品であると言えよう。

この作品には、読者の関心をひく要素が沢山含まれている。例えば、女性作家が男性の恋愛心理を描いているし、性格の変化は作品中の女性達に見られる等である。とりわけ、技法としてのナレーションは、point-of-view を段階的に変えている。発表では narrative discourse がテーマをどう伝えるかについて考察する。

Narrator は作品の最初と最後に、肉体的存在として Ethanを観察し、一人称の語りで、自分の vision を読者に告げる。一章から九章の部分では、即ち、ストーリーが展開する部分では、narratorは、三人称で Ethan の感受性を自らのものとして語る。

作品の時間的構造を narration との関係において整理してみると、作品は過去と現在から成り立っている。絵画の額縁のように、現在の Ethan の生活は、最初と最後で語られ、過去の Ethan と妻 Zenobia との葛藤は、九章をとって語られている。20数年間の持続の時を短く、瞬間的な愛の日々を長く語っている。この Ethan の妻との葛藤、Mattie との愛については、彼の主観は読者に伝わるが、現在の彼に対しては、村人の同情の言葉が伝えられても、彼の主観は容易には伝わらない。それは、narrator が現在の Ethan を語る態度にあるトーンを有しているからである。

Mattie は欠落の状況の中にある Ethan にとって、彼を陽気にさせる唯一の存在である。変化と自由への欲求を Mattie との愛の中に抱く Ethan であるが、彼の感情の動きを分析してみると、彼自身の内部から価値ある感覚をひき出す貴重な時は、Mattie との愛の中にも、reality としての日常の生活の中にもあるという認識が得られる。

Ethan の性格は、妻のそれと対比すると一層明確になるが、彼は自分が嫌悪するものを放棄することが出来ない。彼の日常の労働は、それを病身の妻にまかすのは不可能であると実感させる。彼は、人との約束という日常の原理を自分の感覚の喜びの犠牲にはしない。ここに、彼は彼個人の秀れた本能に従って生きている姿を見せている。Ethan を計画的な心中をする運命に落とし入れていない narrator の意識は、人としての Ethan の資質に信を置いており、故に "powerful" で "carefree" の表情を Ethan からの感銘として受け取ったと思われる。

美的離脱を保って語る narrator の技法は、命題的と言える。運命の受容、運命への愛とも呼べる Ethan の不滅の力を a higher vision として命題的に語るのに、narrator は成功している。

キャンパスニュース

◎英文学科新任教員紹介

・風呂本惇子教授（東京都立大学修士課程修了）
1991年４月に御就任。アメリカ文学、特に黒人文学を研究されている。

・Kathryn Ann Bufkin 専任講師（University of Georgia 修士課程修了）
1991年４月から２年間、語学としての英語教育に専念されている。

◎Richard Sears 英文学科客員教授

一年間の任期を終えられ、本学非常勤講師を勤められた夫人と共に1991年８月、米国 Berea College に帰任されました。

◎JACET 関西支部春季大会

昨年６月８日㈯午後１：30～５：30、本学に於いて、上記大会が開催され、田中慎也氏（JACET 教育問題研究委員会委員長・文教大教授）による講演とシンポジウムがもたれました。（本城智子）

会　員　消　息

- **別府恵子氏**（本学教授）フランス、パリで開催された The First International Conference on Edith Wharton（1991年６月）にて研究発表。
- **B. L. Cooney 氏**（本学専任講師）カナダ、バンクーバーで開催された TESOL Convention（1991年３月）にて研究発表。
- **三宅晶子氏**（本学教授）イタリア、ティロロで開催された Ezra Pound International Conference in Europe

(1991年8月) にて研究発表。

- **高瀬ふみ子氏** (本学教授) 米国フィラデルフィアで開催された Sixteenth Century Studies Conference (1991年10月) にて研究発表。

他、多くの会員が国内学会で研究発表。

- **A. Banerjee 氏** (本学教授) 一年間の英国留学を終え、1991年9月帰任。
- **泥谷征人氏** (本学教授) 本学より University of Edinburgh に1991年9月から一年間留学。
- **太田洋子氏** (E83 GE86)
  1991年4月、大阪学院短期大学に専任講師として就任されました。

会員による新出版ご紹介

- **別府恵子氏**
  As Others Read Us : International Perspectives on American Literature (ed. Huck Gutman) 1991年 University of Massachusetts Press
  『アメリカ文学作家・作品事典』(岩元　巌他監修) 1991年12月　本の友社
- **風呂本惇子氏**
  『女たちの世界文学』(風呂本・楠瀬編) 1991年6月 松香堂
  『キンドレッド：きずなの招喚』(風呂本・岡地訳) 1991年12月　山口書店
- **林和仁氏**
  『小説と反復：七つのイギリス小説』(共訳) 1991年11月　英宝社
- **伊藤栄子氏**
  『現代英語学の諸相—宇賀治正朋博士還暦記念論文集』(千葉修司他編) 1991年7月　開拓社
- **三宅晶子氏**
  Ezra Pound and the Mysteries of Love : A Plan for the Cantos 1991年 Duke University Press
- **高瀬ふみ子氏**
  Playing with Gender : A Renaissance Pursuit (共著) 1991年 University of Illinois Press

編集委員会便り

会員の皆々様にはお元気でご活躍のことと存じます。大会報告をかねての Newsletter 今年もようやくお届けできることとなりました。本年度大会には特記すべき事柄が幾つかございました。別府恵子新英文学科長のご発案により、従来とは異なり“文学・言語学”以外の研究分野からの講演者をお迎えしたこと。C. V. Broderick 大会準備委員長による英語でおこなわれた総司会。同期の学部入学時には既に社会人・家庭人としての豊富な体験がおありで、文字どおり机を並べて勉学に励まれ、共に本大学院へ進学され、修士課程修了の春より研究を続けながら教職につかれた二人の研究発表者。いづれの点に於いても、内容共々、学生はもとより私ども教員・会員にとっても鼓舞され感慨深いことでした。

更に、今回、研究発表の司会の労をとってくださったのは、発表各氏が修士論文の指導を受けられた伊藤教授と高瀬教授でしたが、高瀬ふみ子先生が今年度末をもって26年間教鞭をとられた本学を定年退職されることも然りです。英文学科長、女性学インスティチュートディレクターを歴任されつつ教育・研究に励まれ、特に最近は海外学会での御発表、出版等でその成果を次々とあげておられ、会員にとっては大先輩であり恩師にあたる先生に、いっそうの御活躍を祈りつつ御指導を感謝申し上げる次第です。

本会報では主として学内会員の動向しかお伝えできませんでしたが、所属校の移動、研究成果の御発表・出版、その御予定のある会員諸氏も多いと存じます。委員会ではできるだけ掲載させていただきたいと願っておりますので、英文学科事務所まで御一報くださいませ。また、今年度会費 (1000円) の振込みもどうぞよろしくお願い申しあげます。

KCELS Newsletter 編集委員

(第16回 KCELS 大会準備委員)
- 別府　恵子
- C. V. Broderick
- B. L. Cooney
- 原田　園子 (ＡＢＣ順)

写真撮影　林　和仁

KCELS Newsletter No.7
編集発行　神戸女学院大学英文学会
〒662 西宮市岡田山4—1
Tel (0798) 52-0955
振替口座番号　神戸　0-9323